

# フレーベル誕生百五十年

倉橋 惣 三

今年今月二十一日はフレーベルの百五十回誕生日に當る。年々の誕生日に於て、否、平素常に我等の忘れないフレーベルであるけれども、今年は特に丁重に其の肖像を飾つて、思ひを深くして此の大教育者を偲びたい。

今私の目の前に——私はブランケンブルヒのフレーベル記念館で求めて來たウンガルによるワイマール版のフレーベル像を平生書齋にかゝけてゐる——フレーベルは極めて端正な容姿を以て、眼を凝らして一方を視つめてゐる。考へてゐるフレーベルである。理想凝望のフレーベルである。そのフレーベルの一面が、兩眼の底深い輝きに閃き出でゝゐる。

實にフレーベルは瞑想法であつた。その本來の詩人的素質は當時の哲學思潮に伴ひ生長して、神祕に近き幽玄さになまで奥深められた。

しかも我等のフレーベルは、どこまでも教育者フレーベルである。幼兒等との嬉戯の裡に、その思索と理論とを忘るゝのみならず、自己自らを没入没我せしめたる「子どもの友」フレーベルである。彼れの理論は、より進歩せる教育論から批判せらるゝこともあらう。又、彼れの思想は、より嚴重なる精密思索から指摘せらるゝ點もあらう。しかし、幼兒に對する彼れの性格的な理解と愛着とは、教育的天才の極致として、永久に其の貴さを失はない。今より後更に百五十年、更に々々三百年、眞實絶對の價値と力とを、人類の教育に與ふるに於て、永遠に變ることがないであらう。

眉間の肖像は、いつの間にか、その緊く締めてゐた唇をほゞいていふ。

來れよ。子ども等と俱に遊ばん。